

令和7年度第1回練馬区在宅療養推進協議会認知症専門部会会議要録

- 1 日時 令和7年5月26日（月曜） 午後6時30分～7時30分
- 2 開催場所 オンライン
- 3 出席者 <委員>
古田委員、田邊委員、小松委員、佐藤委員、吉野委員、鶴浦委員、油山委員、志寒委員、樋口委員、横塚委員、小川委員
枝村委員（高齢施策担当部長：部会長）、西方委員（高齢者支援課長）、吉川委員（高齢社会対策課長）、阿部委員（介護保険課長）、内田委員（地域医療課長）
<事務局>
高齢者支援課在宅介護支援係
- 4 公開の可否 オンライン会議のため非公開
- 5 次第
 - 1 令和6年度練馬区在宅療養推進事業実施結果について
 - 2 令和7年度練馬区在宅療養推進事業スケジュールについて
 - 3 練馬区もの忘れ検診について
 - 4 認知症理解普及促進の取り組みについて
 - （1） チームオレンジ活動について
 - （2） 認知症月間と映画上映会について
 - 5 東京都認知症施策推進計画について
 - 6 認知症施策推進計画策定に向けた取り組みについて
- 6 資料
 - 資料1 令和6年度練馬区在宅療養推進事業実施結果
 - 資料2-1 令和7年度練馬区在宅療養推進事業スケジュール
 - 資料2-2 練馬区在宅療養推進協議会委員所属団体の在宅療養推進に資する取組
 - 資料3-1 練馬区もの忘れ検診について
 - 資料3-2 令和7年度もの忘れ検診ポスター
 - 資料4 認知症理解普及促進の取り組みについて
 - 資料5 東京都認知症施策推進計画（概要版）
 - 資料6 認知症施策推進計画策定に向けた取り組みについて
- 7 事務局 練馬区高齢施策担当部高齢者支援課在宅介護支援係
電話 03-5984-4597

8 会議の概要

(部会長)

【開会、挨拶、新委員の自己紹介】

(事務局)

【出席確認、資料確認】

(部会長)

資料1および資料2について説明を。

(事務局)

資料1および資料2について説明。

(部会長)

ご意見があれば、後日、事務局にお知らせいただきたい。

(部会長)

資料3について説明を。

(事務局)

資料3について説明。

(部会長)

もの忘れ検診について、ご意見、ご感想があれば発言いただきたい。

(委員)

MCIと診断されたご夫婦が認知症カフェに参加したところ、症状の進行が緩やかになっていった様子を実際見てきたので、認知症の進行を抑えることを目的に、もの忘れ検診を受診した方に認知症カフェなどの地域活動を医師から案内していただきたい。

(部会長)

社会参加を通して進行が抑えられるような場面もあるかと思う。検診を受けて終わりということではなく、専門の医療機関や地域の活動拠点につながることも重要である。

(委員)

令和5年度に当院でもの忘れ検診を受診した人は9人であったが、昨年度は約30人に増加した。受診者数が増加した理由について練馬区ではどのように考察しているか。

(事務局)

令和6年度からは、認知症の気づきチェックリストの点数にかかわらずもの忘れの心配がある70歳以上の方は誰でも検診を受診できるようにした。これにより、70歳以上の希望者の方の受診が増加したと思われる。また、ご夫婦で一緒に受診される例も多いと伺っている。

(委員)

ご夫婦での受診は確かに多い印象がある。認知機能の疑いがある夫と一緒に受けたいという方もいらした。毎年1回受けられるので、また来年も受診してくださいと伝えている。

(委員)

陽和病院では令和5年度の検診受診者は7人であった。当院で行っているもの忘れ外来は受診者数が約80人であり、約1割がもの忘れ検診で来られた計算である。検診の受診券が一斉送付されたタイミングで検診の申し込みが多くなっている印象がある。また、検診を受けた方のうち、2名はその後も継続して通院されている。もの忘れ検診が病院に繋がるきっかけになっているのではと思っている。

(部会長)

資料4について説明を。

(事務局)

資料4について説明。

(部会長)

認知症の正しい理解を深めるために今後も普及啓発に尽力していく。今年度の取り組みについて、改善点や期待するところがあれば発言いただきたい。

(委員)

中学生に認知症の話をする、身内が認知症であるということを隠さずに発言してくれる中学生が多かった。ここ数10年で認知症の方をとりまく社会が変化しているなど実感している。認知症ご本人にも、認知症を知ることによって恐怖を抱くのではなく、生活を見直したり、前に進む勇気がもらえたり、ちょっとした工夫で生活が楽になる、という思いを持ってほしい。ぜひ、認知症の方が希望を持てるイベントを開催してほしいと思う。

(委員)

昨年度の認知症フォーラムは手話通訳と要約筆記を手配いただき大変好評であった。また、認知症介護家族による介護なんでも電話相談では、その相談内容は年々変化している。介護の困難さの相談より、家族、親類関係の悩みなど多岐にわたってきている。ただただ傾聴する場面が多い。

(委員)

認知症理解普及促進事業を通し、認知症に対してネガティブなイメージではなく、前向きに楽しく、一

緒に暮らしていこうというメッセージを、広く区民に周知していきたい。また、専門職は相談を受けたとき、ついつい「答え」を探してしまうが、悩んでいる方の多くはただ思いを吐き出せる相手、つまりピアな関係での相談も必要としている。ピアとしての相談はとても難しいことだが、介護なんでも電話相談はご家族や地域の皆様だからできることであると思う。皆様と協力していきたい。

(委員)

ケアマネジャーとしてご家族とかかわっていると、治療につながっていないケースが多いと感じている。服薬について、ネガティブなイメージをもっている方も一定数いらっしゃる。治療についてネガティブなイメージを払拭できるような関わりを検討していきたい。

(部会長)

資料5について説明を。

(事務局)

資料5について説明。

(部会長)

練馬区はこれから第10期の高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画の中で、認知症施策をこれまで以上に取り組んでいこうと考えている。練馬区が計画策定を進めていく上で、重点を置かなければいけないポイントなどご意見いただきたい。

(委員)

東京都は早期発見、早期の気づきと早期の介入・診断ということで、検診事業に力を入れている。また、抗体治療薬について、希望する方には公平にその医薬が届く体制を作ることにも力を入れている。そのほか、本人ミーティングやチームオレンジ活動についても積極的に推進しており、練馬区はすでにその方向で以前から事業を実施しており日本の中でも、東京都の中でも、一歩先を行っている地域だと思っている。この流れをより深めていく形で、今後また施策を進めていただきたい。

(委員)

認知症疾患医療センターとして、引き続き区民に向けて普及啓発や講演会を開催していく。また、地域の専門職の方向けの事例検討会も開催していく予定である。認知症基本法や都の計画を見ると認知症の症状が重い方にはスポットライトが当たってないように思う。そういった方々にも引き続き、本人や家族に寄り添って治療や診療活動を続けていきたいと思う。通常受診や、もの忘れ検診のほか、病院の事業として、オレンジカフェや重度認知症デイケアというものも行っている。重度の方もやはり無視はできないので、これからも引き続き相談に乗ってきたい。

(部会長)

行政の立場として、先生方、専門家の方々が、練馬区内や身近なところにいていただけるというのが、本当に心強く、ありがたいと思っている。

(部会長)

資料6について説明を。

(事務局)

資料6について説明。

(部会長)

計画策定に向けて、どのような形でご本人様やご家族の方の声を集めていくかが重要になってくる。区の計画について、策定に向けての取り組みも含め、ご意見あればご発言いただきたい。

(委員)

認知症の本人の声を聞くことは、良い支援をするために最も重要なことだ。ただ、認知症であってもなくても、どう暮らしていきたいか、今自分がどうして欲しいか、という質問に対して、自分の言葉ですぐに話せる人は少ない。認知症のご本人たちには、たくさん話することができる人、少しだけ話することができる人、全く話することができない人、の大きく3種類の人がいると思う。小規模多機能のご利用者では、たくさん話することができる人は多くないという印象がある。お話ができる度合いによってさまざまな支援の仕方があると思っている。共通していえるのは、専門職が話し合っ、ご本人やご家族の声を共有することがよい支援に繋がると思っている。当施設では本人の語りを家族支援に活かす目的でワークショップ形式の介護学べるサロンを開催している。その場ではご本人のご希望とご家族の想いには隔たりがあるように感じた。そういった家族間の思いの調整は専門職が行い、専門職同士が互いに関わって、良い支援を確立させることが必要である。そのためには専門職のスキルアップが不可欠かと思う。医師、訪問看護師、薬剤師、地域包括支援センターの方々をはじめとして、皆さんと個別ケースごとに支援チームを作ることが望まれる。個別支援チームがつくりやすい取り組みを考えていただきたい。

(委員)

家族の声は、その人の年代や家族構成で内容が異なってくる。何もかも自分でやらなきゃいけない、人の迷惑になってはいけないなど、考えていらっしゃる年代の方もいる。そういった考えをほぐしていくことが大切。介護を受けることに対する心理的な抵抗を少しでも和らげ、認知症になっても住み慣れた地域で生活できると思ってもらいたい。

(委員)

お話が得意な方と不得手な方が当然いらっしゃる。認知症に限って言えば進行度合いにより、お話のボリュームや内容に差が出てくる。そのため一場面だけでなくいろいろな場面で、家族やボランティア、専門職含めて本人の言葉や思いを読み取っていくことが必要。声を集めるうえで一番重要なことは、ご本人そのものを理解することである。また、ご家族の思いも同時に聞いていく必要があると日々感じている。認知症があってもなくても、本人の声やその背景にある思いを十分に理解することが必要であり、専門職の育成等も同時進行でしていく必要があると常に感じている。

(部会長)

職員がこれからも様々な場にお邪魔し、ご本人やご家族の思いを伺っていく。委員の皆様からも教を乞うていきたい。

(部会長)

その他について説明を。

(事務局)

その他について説明。

(部会長)

その他について、意見や感想はいかがか。

(部会長)

全体を通して、意見や感想などはいかがか。

(部会長)

【挨拶】

閉会